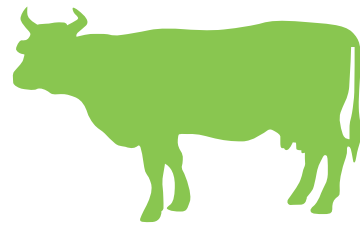


牛肉



◆飼養動向

27年2月現在の肉用牛飼養頭数、3.0%減少

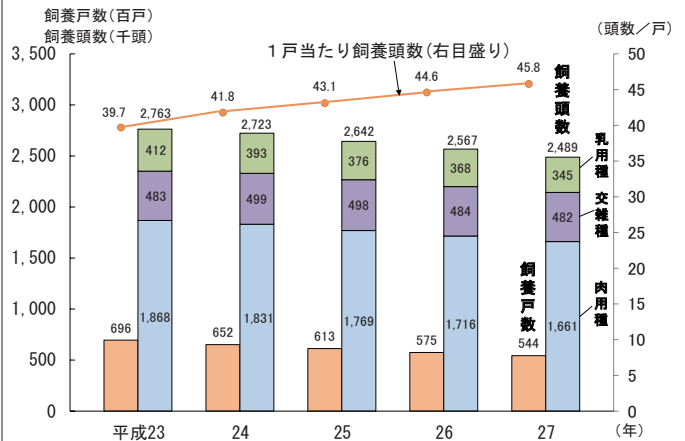
肉用牛の飼養戸数は、生産者の高齢化などによる離農の進行により、小規模層を中心に減少傾向で推移しており、平成27年は5万4400戸（前年比5.4%減）となった。

飼養頭数は、飼養戸数に比べ減少幅は小さいものの、22年以降減少傾向にあり、27年は248万9000頭（同3.0%減）となった。品種別に見ると、肉用種は18年以降、増加傾向で推移していたが、22年に宮崎県で発生した口蹄疫の影響などにより減少に転じ、27年は166万1000頭（同3.2%減）となった。乳用種は生乳需給ひっ迫による後継牛の確保を背景に22年に6年ぶりに増加に転じたものの、23年に再び減少に転じ、27年は34万5300頭（同6.0%減）となった。交雑種は酪農家において乳用種との交配に代えて黒毛和種との交配が進んだことから24年に4年ぶりに増加に転じたものの、25年に再び減少に転じ、27年は48万

2400頭（同0.3%減）となった。

この結果、1戸当たりの飼養頭数は、45.8頭（同2.7%増）とわずかに増加した（図1）。

図1 肉用牛の飼養戸数および飼養頭数



資料：農林水産省「畜産統計」

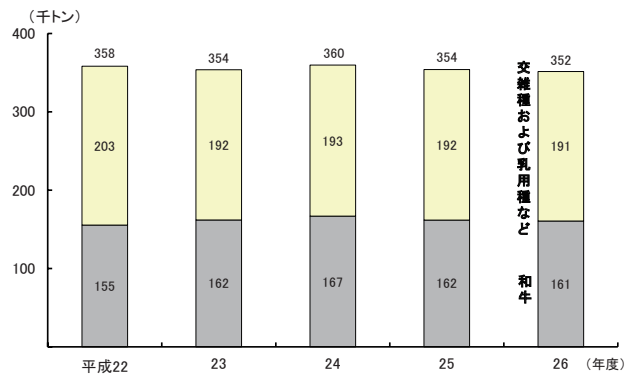
注：各年2月1日現在。なお、27年は概算値。

◆生産

26年度の生産量、0.7%減少

牛肉の生産量は、平成21年度以降、和牛が増加する一方で、交雑種および乳用種の減少により、減少傾向で推移してきた。しかし、24年度は、22年頃の生乳需給の緩和を背景に、酪農家において乳用種との交配に代えて黒毛和種との交配が進み、交雑種が3年ぶりに増加に転じたことから、生産量は4年ぶりに増加した。25年度は、和牛が9年ぶりに減少に転じたため、生産量は再び減少した。26年度は、交雑種は8万600トン（前年度比2.1%増）と3年連続の増加となったものの、和牛が16万600トン（同0.8%減）、乳用種が10万6000トン（同2.3%減）と減少し、生産量は35万1500トン（同0.7%減）と、2年連続の減少となった（図2）。

図2 牛肉の生産量



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：部分肉ベース。

2：交雑種および乳用種などには、外国種などを含む。

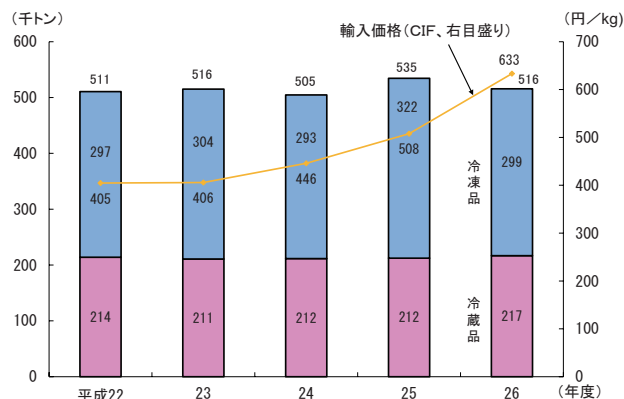
◆輸 入

26年度の輸入量、3.5%減少

牛肉の輸入量は、景気の低迷による比較的安価な輸入牛肉の需要の高まりなどを背景に、平成20年度以降、増加傾向で推移してきた。24年度は、前年度をわずかに下回ったものの、25年度は、外食需要の増大などにより、53万5100トン（前年度比5.9%増）と増加に転じた。26年度は、現地相場高や為替の円安傾向、高い在庫水準などにより、51万6200トン（同3.5%減）と再び減少した（図3）。

国別に見ると、米国産は、25年度は、同年2月の

図3 牛肉の冷蔵品・冷凍品別輸入量と輸入価格



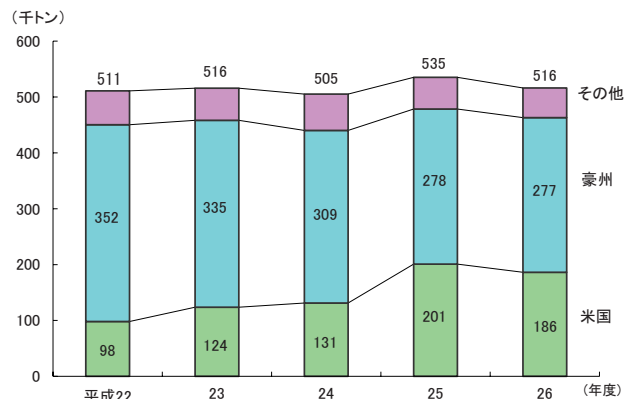
資料：財務省「貿易統計」

注1：冷蔵品にはくず肉等を含む。

注2：部分肉ベース。

BSEに関する月齢制限緩和措置により大幅に増加したものの、26年度は、現地相場高や米国西海岸港湾労務問題の影響などにより、18万6300トン（同7.2%減）と減少に転じた。豪州産は、日豪EPA発効に伴う関税率の引き下げや米国産高値を受けた豪州産への切り替えの進行などにより冷蔵品が増加した一方で、一部外食チェーンの業績悪化に伴う出荷量の減少や日豪EPAに基づく通関線り延べなどにより冷凍品が減少した結果、27万6800トン（同0.3%減）と減少した（図4）。

図4 牛肉の国別輸入量



資料：財務省「貿易統計」

注：部分肉ベース。

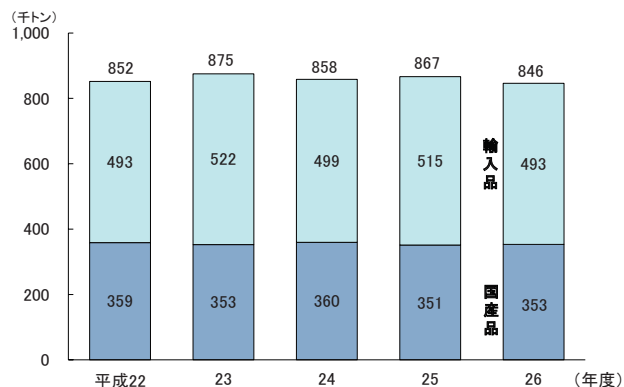
◆消 費

26年度の推定出荷量は2.4%減少、家計消費は4.3%減少

推定出荷量

牛肉の推定出荷量は、平成19年度以降、生産量の増加や輸入量の増加などを背景に、増加傾向で推移してきた。24年度は、輸入量の減少により、6年ぶりに減少に転じた。25年度は、生産量の減少に伴い、国産品は前年度をわずかに下回った一方、輸入品は米国産の月齢制限緩和措置による輸入量の増加により、前年度をやや上回ったことから、全体では86万6500トン（前年度比1.0%増）と増加した。26年度は、国産品は前年度をわずかに上回った一方、輸入品は一部外食チェーンの業績悪化などにより、前年度をやや下回ったことから、全体では84万6100トン（同2.4%減）と減少した（図5）。

図5 牛肉の推定出荷量



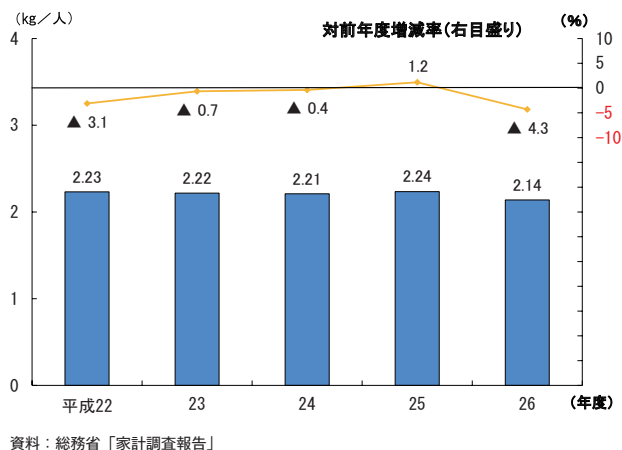
資料：農林水産省「食肉流通統計」、財務省「貿易統計」より
農畜産業振興機構で推計

注：部分肉ベース。

家計消費

牛肉需要量の約3割を占める家計消費は、22年度以降、景気低迷による消費の減退、東京電力福島第一原子力発電所事故に伴う放射性セシウム検出問題などを背景に、減少傾向で推移してきた。25年度は、景気の回復基調などに伴い、年間1人当たり2235グラム(同1.2%増)と、4年ぶりに増加したものの、26年度は、相場高による需要の減退などにより、3年度以降最少の同2139グラム(同4.3%減)と再び減少に転じた(図6)。

図6 牛肉の家計消費量(年間1人当たり)



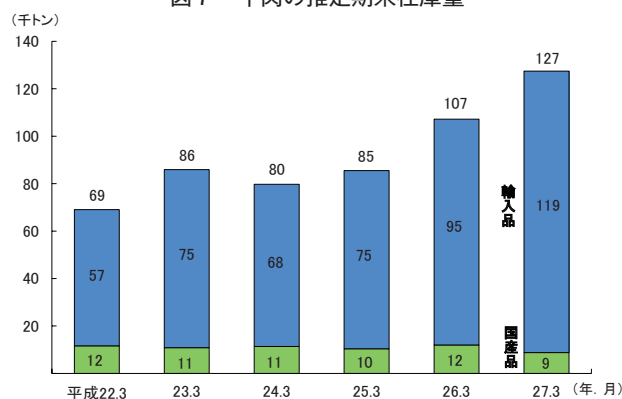
◆在庫

26年度の推定期末在庫量、18.9%増加

牛肉の推定期末在庫量は、平成24年度は、国産品が1万400トン(前年度比8.4%減)と減少した一方、輸入品が7万5100トン(同9.8%増)と増加した結果、全体では8万5500トン(同7.2%増)と増加した。25年度は、国産品が1万2000トン(同15.3%増)と、かなり大きく増加し、輸入品も米国産の月齢制限緩和措置による輸入量の増加に伴い、9万5200トン(同26.8%増)と、大幅に増加した結果、全体では、10万7200トン(同25.4%増)となった。26年度は、国産品が生産量の減少により8800トン(同26.8%減)と、大幅に減少した一方で、輸入品が、日豪EPA発効による豪州産輸入量の増加や一部外食チェーンの業績悪化による出回り量の減少などにより、11万8600トン(同24.6%増)と、大幅に増加した結果、全体では、12万

7400トン(同18.9%増)と前年度に比べさらに高い水準となった(図7)。

図7 牛肉の推定期末在庫量



資料：農畜産業振興機構調べ

注1：部分肉ベース。

注2：ラウンドの関係で、合計値は必ずしも一致しない。

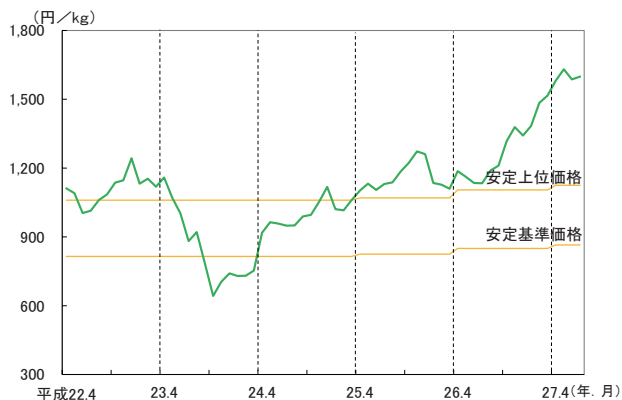
◆枝肉卸売価格(東京・省令)

26年度の卸売価格(省令規格)、前年度をかなりの程度上回って推移

省令規格

牛枝肉卸売価格(東京・省令)は、平成23年度は、放射性セシウム検出による風評被害から大幅に低下したが、徐々に回復し、24年度は1キログラム当たり1000円(前年度比22.1%高)となった。25年度は、生産量の減少や牛肉需要の回復などにより、同1163円(同16.3%高)と、前年度を大幅に上回った。26年度も上昇傾向が継続し、消費増税の影響もあり、前年度をかなりの程度上回って推移した(図8)。

図8 牛肉の卸売価格(東京・省令規格)



資料：農林水産省「食肉流通統計」

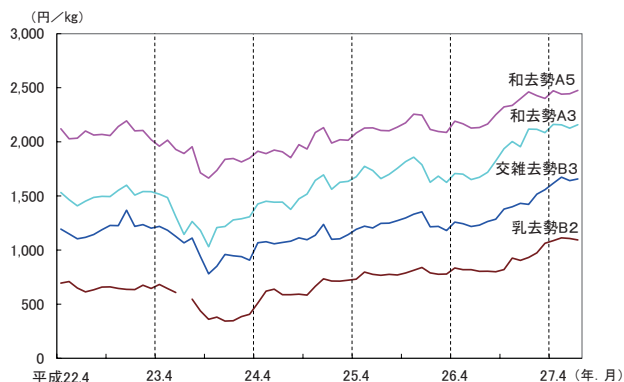
注1：省令規格は、去勢牛B2とB3の加重平均。

注2：消費税を含む。税率は平成26年4月1日から8%、それ以前は5%(以下同じ)。

和牛

和牛(去勢)の卸売価格は、23年度は、放射性セシウム検出による風評被害から大きく低下した。しかし、23年度後半から徐々に回復し、25年度は、生産量の減少や景気の回復基調などにより、A5が同2138円(同8.5%高)、A3が同1725円(同13.2%高)と、いずれも大きく上昇した。26年度も上昇傾向が継続し、A5が同2282円(同6.7%高)、A3が同1874円(同8.6%高)となった(図9)。

図9 牛肉の卸売価格(東京・種別)



資料：農林水産省「食肉流通統計」

注1：消費税を含む。

注2：23年7月の乳去勢B2については取引実績がない。

乳用種

乳用種(去勢B2)の卸売価格は、3品種の中で放射性セシウム検出による風評被害が特に大きく影響し、23年度は大幅に低下したが、24年度は同639円(同35.3%高)と、22年度の水準に迫るまで回復した。25年度は、競合する輸入品価格が高水準で推移したこともあり、同784円(同22.6%高)と、前年度を大幅に上回った。26年度も上昇傾向が継続し、同875円(同11.7%高)となった。

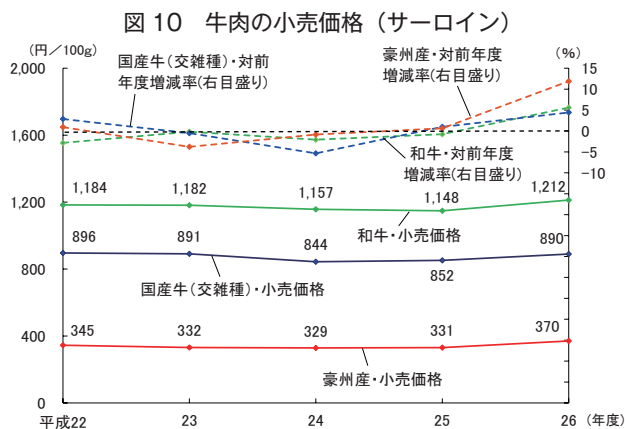
交雑種

交雑種(去勢B3)の卸売価格は、23年度は、他の品種と同じく放射性セシウム検出による風評被害から大幅に低下したものの、24年度は同1107円(同10.4%高)と、かなりの程度上昇した。25年度は、生産量は増加したものの、景気回復基調などもあり、同1249円(同12.8%高)と、かなり大きく上昇した。26年度も上昇傾向が継続し、同1351円(同8.2%高)と、かなりの程度上昇した。

◆小売価格

26年度の小売価格、国産品、輸入品ともに値上がり

牛肉の小売価格（サーロイン）は、消費者の経済性志向の高まりにより高級部位が敬遠されたことから、平成21年度以降、横ばい、もしくは低下基調で推移してきた（図10）。26年度は、消費増税に加えて、相場高による価格転嫁が行われたものとみられ、和牛は100グラム当たり1212円（前年度比5.6%高）と上昇に転じ、国産牛（交雑種）は同890円（同4.5%高）、豪州産牛肉は同370円（同11.9%高）と、いずれも2年連続で上昇した（図10）。



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。

◆肉用子牛

26年度の肉用子牛価格、黒毛和種、ホルスタイン種ともに上昇

黒毛和種

黒毛和種の子牛取引価格は、平成22年度から上昇傾向で推移している。25年度は、堅調な枝肉卸売価格の中で子牛取引頭数が減少したことから、1頭当たり50万3000円（前年度比20.0%高）と大幅に上昇した。26年度も同様の傾向が続き、同57万1000円（同13.4%高）と前年度をかなり大きく上回った。

取引頭数は、17年度以降増加傾向で推移してきたが、22年度は、宮崎県における口蹄疫発生の影響により減少した。23年度以降は若干回復基調となったものの、25年度は、繁殖雌牛の減少に伴い、出生頭数が減少したことから、35万1100頭（同2.9%減）とわずかに減少し、26年度も、33万4000頭（同4.9%減）とやや減少した（図11）。

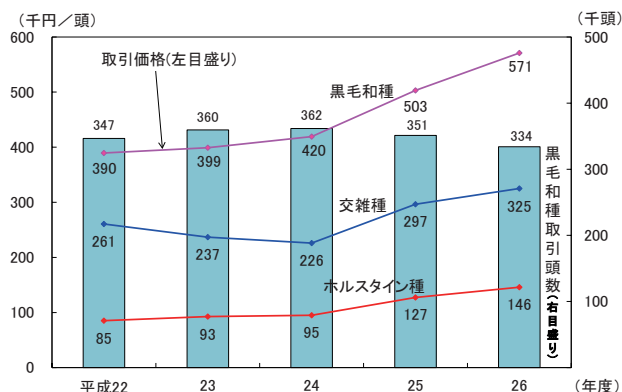
ホルスタイン種

ホルスタイン種の子牛取引価格は、19年度以降、枝肉卸売価格の低下などから低下傾向で推移していたが、23年度に取引頭数の減少により上昇に転じた。それ以降も上昇傾向で推移し、26年度は、堅調な枝肉卸売価格に後押しされ、1頭当たり14万6000円（同14.7%高）とかなり大きく上昇した。

交雑種

交雑種の子牛取引価格は、23年度以降は取引頭数の増加により低下傾向で推移していたが、25年度は、取引頭数の減少により上昇に転じ、26年度は、1頭当たり32万5000円（同9.6%高）と、前年度をかなりの程度上回った。

図11 肉用子牛の市場取引価格および黒毛和種取引頭数



資料：農畜産業振興機構調べ
注：消費税を含む。